

タレント

萩本 欽一 さん

テレビ、舞台、野球、テーマパーク再建等、現在も多方面で活躍中の欽ちゃんこと萩本欽一氏。

日本中を笑顔で明るくしたいと元気に語るその姿は、萩本氏が68歳であることを感じさせない。ときに身振り手振りを交えながらの話しぶりは、聞く者を強く惹きつける。

そんな萩本氏の半生とこれからについて、様々なエピソードを交えながら話していただいた。

(聞き手・構成：西岡 毅)



— それでは早速ですが、まず、萩本さんの子どもの頃について教えて下さい。

一言で言うと、ちっちゃい頃は、恥ずかしがりやの子どもでしたね。小学生の頃、級長やってたんだけども、大きな声を出せない。「起立！」なんて言うときも、顔赤くして下向いて小さい声でね(笑)。

お勉強はね、小学生の頃はできたんだけど、中学、高校となるにつれて、少しずつできなくなったんです。良い子、普通の子、悪い子って順番で(笑)。

— 芸能界を目指されたのはどのような理由でしょうか。

うちが貧しくて、お母ちゃんが借金取りに苦しめられてるのを見てたんだよね。それで、将来お金持ちになりたい、10年で家を建てることのできる仕事はなんだろうと考えたときに、ふっと思いついたのが野球選手と芸能界だったんだね。それで、とりあえず、芸能界に入ってみよう。

まず芸能界に入っただけで、人があまりやっ

い分野はどこだろうと考えたんだけど、当時はお笑いの分野がまだあまりメジャーではなかったの、お笑いの世界に飛び込んだの。

— 芸能界のお仕事は始めから順調だったのでしょうか。

普通はね、1か月もやってれば、才能の片鱗がちらっとは見えるものらしいですよ。ところが僕の場合、3か月やってもちらりとも見えなかったらしくて。ある日、演出家の先生に突然呼ばれて、「向いてないから止めた方がいい。」と宣告されたの。それですっかり落ち込んでたら、師匠が察してくれて、演出家の方に僕をクビにしないように含めてくれたんだよね。

その後、演出家の方が僕の所に来て、「芸能界って世界は、人に応援されることがすごく重要な世界なんだ。そして、君を応援してくれる人がいる。これは将来ものになるかもしれないってことだ。生涯止めないで頑張りなさい。」ってね。それで今もこの世界にいるの(笑)。

— 師匠は萩本さんの才能を最初から見抜いていらっしやっただすね。

ふふ、師匠が僕をクビにしなかった理由はね、僕の返事の声が大きかったからなの。なんでも「はい、分かりました！」ってね。高校生の時にウェイターのアルバイトしてたから、それが役にたった（笑）。

— 有名な「欽ちゃん走り」はどのようにして生まれたものなんですか。

僕はもともとすごく上がり症だったから、肩にグッと力が入りすぎててね。舞台の上で走ってるときもコチコチだったんだ。それを小堺一機がおもしろ可笑しくまねてるのをテレビで見てさ。自分がそうやってる自覚が全くなかったんだけど、おもしろかったから、小堺の動きをテレビで研究したのね（笑）。

— 萩本さんはたくさんの冠番組をお持ちでしたが、テレビ番組の打ち合わせ会議には相当な時間をかけていらっしやっただすしょうか。

僕はね、会議一切やらないの。コンセプトを一言で伝えて、後はもう丸投げする（笑）。「ハガキ読むコーナー作ろうよ。『良い子、悪い子、普通の子』ってコンセプトでやりたいなあ。あとは任せる。」ってね。それで、いったん任せたら以上、もうチェックもしないの。そんなの検閲になっちゃう（笑）。

会議なんてやってしまうと、色々と考えすぎてケチがついてしまうでしょ。どんな良い企画だって、1つもケチがつけられないなんてのは存在しない。でも、会議をやって色々ケチをつけてしまうと、企画の悪い所ばかり気になってしまっただけで盛り上がらない。

それに、皆で話し合っただけで決めると、責任が薄まっちゃう。だから、誰か一人に丸投げして、責任の所在を明確にしておくの（笑）。

— 会議を一切やらないというやり方で、番組がうまくいくというのはすごいことですね。

いや、会議やってないから、最初はうまくいきません。8割方は失敗するの（笑）。

でも、実は、その失敗が大事なんだよね。だって、失敗したら、責任者は自分の頭で本気で考えるでしょ。そうすると、本当にいいものができる。ずっと失敗し続ける人なんていないんだから（笑）。それでいざスタッフが作り直したのを見てみると、自分が予想もしない良い仕上がりになってたりすることもあって、しょっちゅう感心してたよ（笑）。

結局、人に言われてやってもダメなんだよね。だから僕から直接ダメ出しをすることもしないし。ただ、これはどうかなと思ったときは、収録の時に、勝手に変更してたけど（笑）。スタッフはびっくりしてたと思うよ。自分のアイデアが全然変えられてるって（笑）。

— たくさんの番組を同時にされてましたから、忙しくて企画を考える時間がなくて大変だったということはないですか。

そんなことは全然なかったですね。会議もやらなかったから時間もとられなかったしね（笑）。

あとは、例えば、TBSの番組を考えているときに、アイデアが色々出るんだけど、色々な事情からそのアイデアを使えないこともあるんだよね。そういうときは、そのアイデアを別の局の番組に使い回すの。「めだかの兄妹」を歌った『わらべ』だって、もともとTBSでオーディションやってたんだけど、TBSの番組には合わないって思ったんで、TBS局内からテレ朝に電話して「良い子いるよ」ってね（笑）。

同時並行で番組やってたおかげでアイデアの使い回しができたんで、無駄がなくてむしろ楽だったかな（笑）。

—いわゆる「欽ちゃんファミリー」ですが、もともと才能があって芸が完成している方々を集めてお作りになったんですか。

そんなことはないですよ。最初から芸が完成されてると最初のうちは笑いをとれるんだけど、しばらくするとすぐ視聴者にあきらめちゃう。少しずつ成長していく姿を見せると、視聴者も応援したくなるものなの。

例えば、小堺一機は、最初の頃、舞台上上がると緊張で手が震えてたの。それを見て、僕と一緒にだ、応援したいなど。彼はすごいスピードで喋りまくってるけど、あれだって、緊張でしゃべりまくってるんだよ。何か喋ってないと落ち着かないのね。だから、あれは芸じゃなくて性格なの(笑)。

仕事ってというのは、結局、人と人とのつながりが大事だと思うのね。応援したいとか、信頼できるとか思って一緒にやっているうちに、自然にチームができてくる。そういう感じなの。信頼できる人に対してなら、安心して丸投げもできるでしょ(笑)。

—萩本さんは、現在、「ちょんまげワールド伊勢 安土桃山文化村」という時代劇テーマパークの再建のお手伝いをされているとのことですが。

そのテーマパークでは毎月1000万円の赤字が出て、再建のお手伝いを全部お任せしたいってお話をもらったんです。今までは皆さんをワハハと笑わせる仕事をやってきたわけだけど、そういう笑いだけではなくて、皆さんをニコッと笑わせる仕事もいいなと思ってお引き受けしたのね。

テーマパークのスタッフがまず頑張るって、それを村の人が応援して、それを県民が応援している、その姿をお客さんが見に来るっていうコンセプトを考えてるんです。

—再建の方法として、具体的にはどのような方法をとられたんですか。

やっぱりお金がないわけだから、従業員の給料下げたんですね。ただ、給料下げる代わりに、スタッフが良いアイデアを出してお客さんが1人増えると、給料1円上げるってことにしたの。そうすると、300万人入ったら、300万円増えるんだよってね。うまくいったら大金持ちになっちゃう(笑)。

あとは、事務所の電気と水道止めたんですよ、節約のために(笑)。それで、貧乏を楽しんで、笑い飛ばしてやっていこうねと。そうすると未来につながるからって。

それに、仮に後で再建成功の物語を出版するとしたら、最初がひどい状況の方が物語になるよって(笑)。お金がないってことを逆に売りにしていくってということなんだよね。

—欠点を売りにしていくという発想の転換が大事なんですね。

そうです、そうです。

CMも作ったんだけど、第1弾は、「大変です。人が来ないんで社長が逃げました。だから入場料下げました。」って。それで、第2弾は、「大変です。元気が出てきて社長が戻ってきました。でも、入場料据え置き。」っていう(笑)。

あと、床が壊れてて閉鎖してた建物があったのね。それで、あえて建物をオープンして、壊れている床の部分に看板立てたんだ。「お金がなくて修理できずに困っています。誰か修理して下さい。」ってね。そしたら、本当にお客さんの1人が無料で修理してくれたの(笑)。

こういう小さなアイデアでも、これを積み重ねて行くと、少しずつだけど、テーマパークが明るくなって、そうしたら、村の人や県民も明るくなってくる。いつかそれが日本中に広がるかもしれない。



仕事ってというのは、結局、
人と人とのつながりが大事だと思うのね。
応援したいとか、信頼できるとか思って
一緒にやっているうちに、
自然にチームができてくる。

萩本 欽一

—萩本さんは色々な活動をされていますが、その根底にあるのは、人を楽しませるというお気持ちで一貫してらっしゃるんですね。

今までは、テレビ、舞台の世界を通して、皆を楽しませてきたんだけど、これからは他の分野でも皆を明るくできないかってね。今の日本は不景気で、皆下向いてるでしょう。そんなご時世だから、皆を明るくしたいって気持ちはすごく強いよ。もちろん、政治家の皆さんにも景気対策をもっと頑張ってもらわないとね（笑）。

—萩本さん自身が政治家になるというのはいかがですか。

興味はあるの、それは。だって、政治家ってというのは、結局、皆を幸せにする仕事でしょ。僕がずっとやっているのは、皆を楽しくさせたい、幸せにしたいということだから。

実は、以前、実際に打診されたこともあったんだけど、ただ、わざわざ国会に行ってやるっていうと

ころまでは魅力を感じなかったということかな。僕は、テレビを通して1日1時間だけ皆さんを幸せにしているの。それで十分じゃないかってね。

—今日は色々貴重なお話をどうもありがとうございました。特に、会議をせずに失敗を重ねて作品を作っていくというお話がとても印象的でした。

うん、芸能界のお仕事には正解というものがないから、何度も失敗を重ねて作っていけるんだよね。

ただ、皆さんがた弁護士のお仕事は、どこかに正解というものがありそうだから、失敗を重ねていくってわけにはいかないだろうけど（笑）。

プロフィール はぎもと・きんいち

1941年5月7日、東京生まれ。1959年、高校卒業後、浅草東洋劇場の軽演劇の一座に加わる。1961年、同志とトリオを組んだり、自ら座長となり浅草新喜劇を作る。1966年、旧友、坂上二郎と「コント55号」を結成。バラエティ番組や司会として活躍。